慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	斯道文庫蔵『古今賢問愚答』(零本) 解題と翻刻
Sub Title	A reprint and a study of Kokinkenmonguto housed in the Shido bunko institute
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2014
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.49 (2014.) ,p.1- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20140000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

斯道文庫蔵『古今賢問愚答』(零本)

解題と翻刻

川上

新一郎

はじめに

前輯に引き続き斯道文庫所蔵の古今集注釈の零本を紹介する。

現存するのは巻頭歌から春下の12番歌を掲げたところまでであ

が加えられているが、内容は未紹介であった。室町期の草稿で、 片桐洋一氏御所蔵当時展観された事があり、その際簡単な説明

問者・答者に関する手がかりも一切なく、前輯の『古今和歌集 実際の問答であると考えられる。末尾を欠いているため、年代、 る。珍しいのは問答体となっていることで、自問自答ではなく、 [長享三年講釈]』以上にいかなる注か明らかでないが、内容的

> るため、翻読に困難がある点、あらかじめ諒とされたい。 翻刻を掲げる事とする。前輯と同じく、類本なく、草稿でもあ に注目すべき点がある。かなり虫損があるため、解題に続いて

一書誌

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵(〇九一―ト三五八)

— 册

古今賢問愚答

外題

存巻一、二 (尾欠)

〔室町後期〕写・自筆草稿

書「古今賢問愚答」。尾欠により裏表紙なし。料紙、楮紙。墨付、 仮袋綴。本文共紙表紙(二七·六×二一·七糎)、左肩打付

遊紙なし。 字面高さ、 約二五・五糎 (和歌本文)。 毎

半葉十二行内外不等。内題なし。序文様のもの六行の後に「春

く「おもふとち」(26)の歌本文を掲げ、以下落丁。従って、 哥上」とあり、巻二は「春下 巻第二」とする。巻二の末尾近

奥書なし。印記、表紙中央「新宮城書蔵」(重郭朱印)。他に左

下に朱丸と「丙之弐番」、右下に「丁之三番」とする単郭朱印

(整理棚番号であろう) あり。平仮名交り文で、表紙外題をふ

くめ全巻一筆の草稿と見られる。

現存部分は巻頭歌より12番歌までの内、七十二首

(126番歌は

で答がある。塗抹や行間・余白への書入が多い。また、虫損が 号があり、改行一字下げして問があり、さらに問より一字下げ 歌のみで以下欠)の抄注で、和歌を一二句掲げ、以下省略の記

あり、読み得ぬ所もある。 書写年代については確言できず、内容との関わりもあるが、

はあるまいか。後にさらに検討する。 前輯の『古今和歌集〔長享三年講釈〕』と同じかやや下るので

内容

大阪女子大学)に展観されたとのことである。片桐氏の解説に 8) によれば、和歌文学会関西例会 本書は片桐洋一氏旧蔵本で「和歌史研究会々報 (昭和六十年七月六日、 85 昭 60 於

は次のようにある。

九、古今賢愚問答

(写本)

「……如何」と聞く某の問に対して著者が答えたもの。

室町時代の著者自筆稿本。 未研究。 新宮城書蔵本。

下書きが見える)いずれも近時のものでさしたる由緒はないと 簽によられたためであろうが、帙ならびに題簽の墨書 書名が「古今賢愚問答」となっているのは本書を収める帙題

思われるので、正式書名は本書の外題に従い、「古今賢問愚答 う語が耳になじまない上、序文様のものには「数ケの愚問は戸 らず帙外題を「古今賢愚問答」としたのは、「賢問愚答」とい とすべきであろう。外題が「古今賢問愚答」であるにもかかわ

細の賢答を仰き奉る儀にて候へは」とあって、こちらは「愚問 賢答」の形であることにもよろう。つまり「賢愚問答」という

題名は妥協の産物なのであろう。

の翻刻を参照されたいが、 実はこの題名の問題が本書の性格を知る上で重要となる。 冒頭の序文様のものは「古今集哥の

かに問者の文章である。従って、この文中で「愚問」と言い、 ひ候やうに手をとるく〜御教訓大幸たるへく候」と言い、明ら 不審注あつめてこれを捧候」と言い、「小児のいろはなとなら あらかじめ余白がとってあったものではなく、答を書終えると

「賢答」と言うのは当然である。

なる草稿である。答者にとって問者の序文を引写すにおいては 「愚問」であり「賢答」であっても差支えないが、外題を記す 方、問も答も外題も一筆である。つまり本書は答者の手に

子ではなく、目上か、それなりに身分の高い人物であったと考 愚答」としたのであろう。つまり答者にとって問者はただの弟 ときは「愚問賢答」とは書きにくかったので、逆にして「賢問

また、本書は草稿であって、訂正、塗抹、補入などがきわめ

て多いが、よく見ると、問には訂正等がなく、答にのみ著し

い。さらに訂正、塗抹、補入などを訂正前の文と比較すると、 はない事も明らかになる。また、答の文は問の文とほぼ同大の それらは推敲の結果と認められ、 聞書の際の文字の乱れなどで

首毎に答を推敲しながら書付けていったものである。つまり、 従って、本書は問者の問の一覧をもとに序文と問を引写し、 字詰で書かれている。

ている箇所がある事から解るように、後に全面的な見直し訂正 次の歌に移っていったと考えられる。但し、答が全て抹消され が行われた痕跡がある。

貴重である。但し、訂正、推敲はミセケチではなく、塗抹で行 か否かは不明であるが、本書は推敲の跡を留めている点からも に提出するつもりであったと思われる。清書と提出が行われた 当然のことながら、本書は草稿であり、これを清書して問者

われているため、訂正以前の文字の多くは読み得ない

このような問答体の古今集注釈としては、古くは『古今問答』

図書館蔵)が知られている。また、『三流抄』には問答体のも のと問答体でないものとがあり、こちらは実際の問答なのか (中山兼宗問・藤原俊成答、建久二年〈一一九一〉成立、

うな問答体の注釈は数少なく、しかもなまなましい草稿である 架空のものかは不明である。その他、本稿でも後に取上げる大 点興味深い 江広貞注の仮名序部分も問答体である。しかしながら、このよ

で答え方が変わってくるため、他の注釈書との比較が難しい。 次に内容を検討するが、 本書は実際の問答で、 問次第

さて、

身分の高い人物と見られるが、いずれも何人かの手がかりはな また、先に述べたように、問者は答者より目上かそれなりに

く、年代も明らかでない。

の注釈との比較を行うこととする。歌本文をあげ、問は省略し、 ここではまず、本書の答の部分で特徴のある箇所をあげ、他

答で問題とする部分のみを掲げることとする。全体は後述の翻

刻を参照されたい。

此哥昌泰二年十二月十九日の立春をよめり(後略

としのうちに春はきにけり一とせをこそとやいはんことしとや

がありそうとは言える。

歌注、古今和歌集三条抄、大江広貞注などと分類した注と関係

いはん (1)

このように根拠もなく、詠作の日時や作者名などの固有名詞

も日時や人名、説話の構成が異なることもある。 見られるもので、その場合、別種の注のみならず、同種の注で をあげたり、説話化したりするのは、中世の古今集注釈にまま

注があるのみならず、諸本の異同が大きく、同じ注の異本なの 題』(昭46~62刊)において詳細に述べられているが、多種の(ギ そのような注については片桐洋一氏が『中世古今集注釈書解

うなっている。

合が多い。『古今集注釈書伝本書目』を作成した際もその辺り たのが実情である。 は明確でなく、取りあえず類似の注はまとめておくしかなかっ か、別の注と称すべきなのかが判然とせず、扱いに苦慮する場

然としたことを言えば、毘沙門堂本古今集注、 かなる位置にあるかを明らかにすることは難しい。それでも漠 弘安十年古今集

そのような状況であるからして、本書が古今集注釈の中でい

と年月日を述べている。但し、年月日を言うのはここだけであ まず、1番歌で「此哥昌泰二年十二月十九日の立春をよめり」

毘沙門堂本古今集注は毘沙門堂旧蔵本では「昌泰二年十二月

同種の注でも年次が一致するとは言えない。 れる曼殊院本では「元慶八年十二月」となっており、必ずしも たとえば、弘安十年古今集歌注(佐賀県立図書館本)ではこ

ずれもこうした年月日をあげる注である 十九日」であるが、毘沙門堂旧蔵本より古態をを有すると思わ る。先に挙げた本書と関係があるかもしれないとした注釈はい

- 4

ふる年に春立ける日とは昌泰二年十二月十九日立春日仙洞

の哥合によめる(後略)

これが、同じ弘安十年古今集歌注でも尊経閣文庫本(天文六

年写本)ではこうなっている。

旧ル年ニ春日ト云フハ仁和三年十二月春立日仙洞ノ哥合ニ

ヨメル (後略)

やはり年次に異同がある。

また、古今和歌集三条抄は次のようである。 昌泰二年十二月十九日立春ナレハナリ(6)

ついで大江広貞注である。

(前略)寛平二年、閏月ありしかは、そのとし十二月廿八

日二土用あきて、春の節分になりし日よめる哥也。(後略)

このように架空の年次や場を設定するについても、注によっ

本書がいずれに最も類似するかはわからないが、いずれにし

てまた、伝本によってさまざまである。

ろこのような注釈の影響下にあるとは言えよう。 次は「よぶこ鳥」を論ずる29番歌である

をちこちのたつきも… (29

しかにはならはす候、但三鳥大事なと申て、はと、猿、は (前略) よふこ鳥春の山なとに鳴鳥、其すかた何鳥ともた

こ鳥なと申めり、高麗にある女の子をくして野を行時鷲に

をよふ声也、それをはこ鳥と云ともいへり、よふこ鳥この 子をとられて歎死て彼鳥となれり、はやこくくと鳴、我子

毘沙門堂本古今集注は次のようである。毘沙門堂旧蔵本、曼 説そ似よりたると申き、鶯と云一説も侍るにや

といへり、此義心えす、俊忠はうくひすを云と云へり、さ (前略) よふことりさま~~の義あり、賀茂重保は猿を云 殊院本ほぼ同じであるので、曼殊院本のみ示す。

云へり、此は万葉の注にあり、高麗国に永蘭と云野に下女 ふこ鳥と云也、或人云、三月はかりにはことりと云ものと

せる説はなけれともきとくくと鳴は子をよふに似たれはよ

ひしに死たりけるか、鳥となりてこれいまもはやこくくと の子をいたきてとをりけるを鷲にとられてはやこくくとよ

朝臣はすゝめを云といへり、皆させる本説なし、 よふをはことりと云といへり、此を喚子鳥といへり、国信 しはらく

本説につかははことりを云へき敷

弘安十年古今集歌注は次のようである。佐賀県立図書館本は

長大なので、一部に破損はあるが、尊経閣文庫本で示す。こち

(前略) ヨフコトリトハ、或ハ猿ヲ云トイヘリ、誠ニハコらのほうが原型に近いのではあるまいか。

云山ヲ女ノ子ヲイタキ〔テ〕トホリケルカ、白地サシスヘト書ケリ、是〔伯〕選ト云文ニ委クアリ、昔高麗永蘭山トルテ三月ナントニ山ニアル鳥也、ハコ〈~ト鳴也、喚子鳥・テ三月ナントニ山ニアル鳥也、ハコ〈~ト鳴也、喚子

ヲハヤコ~~ト鳴也、仍喚子鳥ト名付、(後略)
ナキ死ニケリ、此鳥ト成レリ、生レカヘリテ鳥ト成テモ尚

タリケルヲ鷲〔ニ〕取レテハヤコ~~ト鳴キアリキケルカ

古今和歌集三条抄は「或曰」として毘沙門堂本古今集注と同

た注釈類と類似点のある注であるが、「或曰」とする部分は、なお、付言すると、古今和歌集三条抄はもともとここに掲げじものを引用するが、本来の部分には「はやこ~~」の注はない。

意を要する。 一段と毘沙門堂本古今集注に類似しているように見えるので注右に述べたように毘沙門堂本古今集注に類似しているように見えるので注

大江広貞注にもこの話はない。

次の例(33番歌)はどうであろうか。

色よりも香こそ (33)

形見とせる事の侍るとかや、此□の子細さしてさたにをよ帰りて即死云♪、大子歎の余に尋行云♪、此袖の梅をみて女を思けるか彼女我国へ帰ける時宮中の庭の梅花袖に入て女を思けるか彼女我国へ帰ける時宮中の庭の梅花袖に入て

毘沙門堂本古今集注(曼殊院本)ではこうある。はさる歟、或説につきて無詮なけれとも凡注也(後略)

(前略) 梅の花の香は古人の袖の香ににたりと云事あり、

へかへるとて衣をかたみにと、めてかへりぬ、王子かの衣唐に照梁太子と云人他国より来れる女を思けるか彼女本国唐の心也、文集云、存香有薫伝 古袖と云り、文の心は大

たり、それより梅か香を古の人の袖の香と云事あり、そのをとりて見れは梅花をつゝめり、此花かの女のありかに似って、ストスト

史記ノ文ヲヨメリ、梅香衣ニ薫シテ旧人之跡問、非夢非覚同(寛平)御時ノ哥合ニ宇多院ヨミ給フ御哥也、此哥ハ

弘安十年古今集歌注は次のようである。尊経閣文庫本で示す。

心をよめる世

ハ禹御門ノ〔子ニ〕照琳太子ト云人在セリ、女ヲ心サシ深ル、恋慕之涙タ失神シ、先帝相顔何忘テ安年ヲ、此文之意

之ウツクシカリケルヲ袖ニコキ入テツツミテ帰リヌ、程無 ク思玉へリ、彼女本国へ〔帰〕時彼太子ノ斬端ナリケル梅 して、御覧しける心をよめる のうつくしきを、李夫人の恋しき御かたみにおほしめしな 世。

ク死シテ太子此事ヲ聞テ歎テ無限シテ彼ノ女之国ニ尋テ行

給ヒテ其家ニ行キ給ヌ、主ハ無シテ空キ衣ノ有ケルヲ取テ 集注、弘安十年古今集歌注、古今和歌集三条抄とは一線を画し

これを見ると、どうやら大江広貞注は本書、

毘沙門堂本古今

見給タリケレハコキ入テツ、ミタリシ花本ノマ、ナリ、太 ているらしいことがわかる。そこで、以下では毘沙門堂本古今

子是ヲ見テ深クテ彼女ト云フハ直人ニアラス、彼ノ国ノ王 ノ姫宮女帝御門也、照琳太子之色深キヲ問テ彼ニ逢ムカタ 集注以下の三注と比較することにする。

参所なれは長谷を古郷と云り 人の家とあるは浄尊法橋の家也、古郷といふは貫之つねに り、しかれは貫之つねに長谷にまいりけるに宿せるやと也 父文袴か子をもち侍らて長谷観音にいのり申て貫之を生せ 此哥のことは、はつせにまうつることにとあるは、貫之か (後略

古今和歌集三条抄を見てみる。

自是シテ梅カ香ヲ袖ニ薫スト云ヘリ、必ス哀傷ニ読タル也

メニ直ニ人之形ニ成テ太子ノ国ニ行テ奉レリト」逢云フ、

人はいさ心も… (42

昔大国ニ昭明太子ト申ケルオハシケリ

年比女ヲ思召ケル

(前略) 貫之は長谷寺に月ことにまうつる也、 此故は紀文 毘沙門堂本古今集注(曼殊院本)は以下のようである。

る故に名内教房と童名を云へり、人の家とは浄尊法橋の家 経をたまはると見て後貫之をうめり、経をたまはると見け 誇男子のなきことをなけきて泊瀬の寺にまうてける時夢に

也

哥にふるさと、云は常に参る所なれは貫之はせをふる

あひし給し梅の、彼御匂ひにしみたるを、かのなつかしさ 此歌の心は、李夫人死て後、漢皇の御思ひのあまりに、彼 御殿の軒は近くうへられたりしほとに、そのむめの香

大江広貞注は以下のようである。

| 或日

梅花有」薫伝、古袖、云文ノ心也ト云ヘリ

臥シツミ傍ヲ見給ヘハ梅花アリ 此心ヲヨメリ

染殿内侍

イラサリケレハ素尋行給ヌ 彼女俄二死タリケリ 素歎ティラサリケレハ素尋行給ヌ 彼女俄二死タリケリ 素歎テ 二俄親ノ国へ罷トテ梅花ヲ袖ニ入タリケリ 遙ニ久シクマ

然ニ梅ヲハ古人ノ香トイヘリ

弘安十年古今集歌注(尊経閣文庫本)にはこうある。

詞長谷マウツルトハ貫之常ニ参ケル也、是ハ貫之長谷利生へっせ

橋也、サタカニナントハ定テト云事也 ニ儲タリケル子也、上ニ如云カ家主ト云ハ忠峯カ舅栄仙法

ヲヨメリ、万葉ニ云、御長谷野布流サヘテ吹風野音ニソヒ、 フ、サレトモ実ニハ彼ノ所ノ名ニ古郷ト云フ名アリ、 人ハイサ心モシラス古郷ハトハ貫之カ常ニクル所ナレハ云 其意

古今和歌集三条抄はこうある

ク鐘ハアリト云、是モフルサト、ハ所ノ名也

テ貫之 ヲマウケタリ (朱)故ニ内教房ト名ットイヘリ イ説也 ウテヲシケルニアル夜ノ夢ニ御張ノ内ヨリ経ヲ一巻給トミ 貫之ハ長谷寺観音ノ申子也 父文誇子ノナキ事ヲ歎テ月マ

(中略) カクテモ昔ノ

大和国ハフルキ都ニテ古里トイヘリ ヨシミニテハツセへ常ニ参詣ス 哥ニモ古郷ト侍リ 大方 初瀬ハ雄畧天王ノ都

\或曰 序二人ノ家ト云ハ浄尊法橋ノ家也

山吹はあやな、さきそ… 123

(前略)

但橋諸兄大臣山城国井出の寺に山吹をうへたりけ

るに仍井出大臣ともいふといへり、又迦留大臣同国光明山

臣のもとへ見におはせよ、といひつかはしたりけれは、ゆ の寺を造てかの井出の寺の款冬をうつしてうへて後諸兄大

兄のもとへつかはしける哥といへり

かんといひてやくそくたかひけれは、迦留大臣のよみて諸

毘沙門堂本古今集注(曼殊院本)は以下のようである。 (前略) 此哥は橘諸兄の大臣山城国の井出寺を造てくわい

同国に光明寺を造て彼の井出寺のやまふきをうつして廻廊

ろうに山吹をうへませり、仍号井出大臣と、高向迦留大臣

けれは、こよひゆかんと云てこさりけるによめるなり、

にうへて後、諸兄のもとへみにおはしませよと云やりたり

弘安十年古今集歌注 留の大臣の哥也、(後略 (尊経閣文庫本)にはこうある。

作リテ廻廊ニ山吹ヲ植タリケリ、内大臣高向ノ迦留彼ノ寺 此哥ハ日本記ニ有リ、是ハ左大臣橘ノ諸兄山城国井出寺ヲ

シ植タル、来テ見給ヘト云ケレハ、コント云テマサリル日 留カ諸兄ノ方へ使ヲ以テ云ヒ遣ル、君ノウヘケン山吹ヲ移 ヲ遷テ光明山ヲ立山吹ヲ移シテ彼ノ寺ノ廻廊ニ植テ彼ノ迦

読遣ス、迦留大臣ノ哥也、(後略

古今和歌集三条抄はこうある。

ウヘタリケルヲ経大臣ヤマトニ光明山ヲ作テ井堤ノ款冬ヲ(前略)右大臣橘諸兄山城ノ井堤寺ヲ作テメクリニ山吹ヲ

ウツシテ植タリ 諸兄大臣ヲヨヒテミセムトシ給ケルニコ

サリケレハ読テツカハシケル也(等準質をプロメルイ

説話的な箇所を選んで比較してみたが、本書がこれらの注釈

で取上げた四種の注釈の中では、毘沙門堂本古今集注が最も類と類似している点は確認できるであろう。さらに言えば、本稿

さればと言って、本書がことごとく毘沙門堂本古今集注と説

似していると言えるのではなかろうか

を同じくするとは言えない。

例えば次のような箇所である。

春の日の光に…(8)

は東宮の御休所事也、かしらの雪しらかなるへし、わひし春の日のは春宮御事也、陽成院東宮の御時御同居ありけれ

かなし凡同事にて侍へし、物かなし物わひしらなともいへ

これが毘沙門堂古今集注(曼殊院本)ではこうなっている。

n

のみやすところ也、(後略)

(前略)

清和天皇春宮の太子の御時也、

この時二条后春宮

歌集三条抄はだれとも言わない。念のため言えば、大江広貞注弘安十年古今集歌注(尊経閣文庫本)でも清和天皇、古今和

も清和天皇である。

とは言っても、本書がそのような注に直接よっているとは言えこのような具合で、毘沙門堂古今集注が比較的類似している

ないようである。

三 成立

まず、成立年代は本書が草稿そのものであることから、書写有名詞もない。従って、成立に関して言えることはほとんどない。本書は零本であるためもあって、成立に関わる手がかりも固

子ではなく、目上の存在(ある程度地位の高い人物)らしいこ大過ないであろう。また、本書の間者が答者に対して単なる弟年代がそれとなるが、まず、室町後期から末期にかけてとして

る。ただ、問答の内容を見て、なにがしかの推測をすることはとも既に述べたが、どのような背景にあるのかは全く不明であ

許されるであろう。

まず、問者が大変熱心であることがわかる。ほとんど一首毎

に質問しており、時には微に入り細を穿って質問して、答者を

悩ませることもあるほどである。古今伝授を受けるほどの域に

達しているか否かはとにかく、少なくとも初心者でないことは

明らかである また、既述のように、答者は時に説話に言及することがある

が、問者の方からそのような話題に触れることはなく、あくま

れる『僻案抄』を特別扱いして「御抄」と称することがない点 に重んずる中世諸注と同様である。ただ、中世諸注にまま見ら にほぼ限定されている。これは『僻案抄』と『顕注密勘』を特 で和歌の解釈中心に尋ねている。その際、依るのは『僻案抄』

のという立場の物言いである。例を挙げれば次のごとくである。 が見える点で、歌道師範家の一員もしくはその教えを受けたも 方、答者について注目すべき点は、「当流」「家説」の言葉

は一応留意すべきかもしれない。

あさみとりいと… (27)

柳かは柳哉といふ心なるへし、玉にもぬくか春のあをやき

れて入たる歟

浅也、朝説をは不用

とある本もみえ侍る歟、

当流た、柳かを用、

あさみとりも

あるのに対応していて、まずは普通の発言である

これなどは、『六巻抄』に「浅緑也一説朝緑ト云、

次はどうであろうか。ここでは問者が『僻案抄』を引用して

尋ねているので、全文引用する

も、ちとり… (28

たしかに一説の御口伝をうけたく候

僻案抄に両説あり、此鳥まことはいつれの鳥を申候やらん、

我やとのゑのみもりはむも、ちとり千とりはくれと君はき の諸鳥と心得候、又鶯の説これも一向に不捨候、萬葉に、 僻案抄に両説候歟、愚本被借失て不及引見候、家説先百千

おほよそをしはかられ侍るにや、後拾遺にも鶯の哥をはな の哥をはなれても、ちとりよふことりなと入たる心にても まさす、とある歟、これもうくひすとはきこえす、 此集鶯

せて所持していないという。定家が『源氏物語』の証本を盗ま 不及引見候、」という発言である。答者は『僻案抄』を貸し失 まず、注目されるのは、「僻案抄に両説候歟、愚本被借失て

ではあるまい。しかし、この場合は明らかに本そのものが手元 れは証本がないだけで、『源氏物語』を持っていなかったわけ れて長い間不便を託っていたというのは有名な話であるが、そ

を引いての問に「家説も同前なり」と答えた例である。 うな物言いが随所に見られる点も見逃せない。次は『僻案抄

した箇所はないものの、特別扱いもしていないようで、そのよ にないといっており、不審を覚える。また、『僻案抄』を否定

たれしかもとめて… 58

られたり、此儀をまもるへきにや

僻案抄には誰しかものしもしはやすめたるもしのやうに注せ

である。

もう一つ留意すべきかと思われる点は、

本書の成立時期との

家説も同前なり

はんすらん、但上に如申候、依無本不及引見、」と答えている。 ける歟、 次は、 僻案抄義大概当家も同心にて候、其儀そしかるへく候 同様に 『僻案抄』を引いての問に、「此哥先達種ミ申

> さくら花春くは、れる… 61

この辺り、『僻案抄』との距離をどのように解するかは微妙である。

候、 此哥僻案抄にも注せられ侍れとその注猶分明に存知せられす

此哥先達種ミ申ける歟、僻案抄義大概当家も同心にて候 あかれやはせぬ、いか、心得へく候哉

及引見、(後略 其儀そしかるへく候はんすらん、但上に如申候、

の答者は例えば二条家の正統に属する人物ではないと言えそう ころ、『僻案抄』になにがしかの距離感があることから、本書

期の書写本であり、それらの注釈類も伝えられていたことはた られる。無論、先に比較の対象とした注釈類の写本は多く近世 の時期は、既に説話をしばしば持ち出す注釈は時代遅れと考え 関連である。室町後期から末期と言えば、 宗祇以後である。こ

しかである。しかしながら、伝え書写することと、講釈するこ

以上、判然としない検討を行ってきたが、説話に言及すると — 11 —

との間には落差があると考えられる。近世期に中世の注釈の集

成を手がけた北村季吟の『教端抄』や平間長雅系の人々が集成 したと考えられる『古今集諸抄』(大阪府立図書館蔵写本)を

それらを考えれば、本書が本流をそれていることは言えよう。 安十年古今集歌注と関わりがある「三流抄」が含まれている)。

ず、前記説話系の注釈はほとんど含まれていない(後者には弘 見ても、伝授系統にはそれほどこだわっていないにもかかわら

説話系の注釈類には正統派の注釈ではないという印象がつき

まとうが、宗祇以後となれば、一層その感が深い。

以上、あまりに漠然とした物言いであるが、本書の成立した

場は具体的に指摘は出来ないが、そのようなところを想定すべ

きではなかろうか

注

1 学蔵 のまま載せた。 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編 (黒 E 98) (平19刊) なお、 『愚問賢答抄』を「別書か。」としたが、や 94頁)では実見せず、片桐氏の解説をそ 同書51頁でノートルダム清心女子大 『古今集注釈書伝本

はり別書であった。

2

二条良基問頓阿注

愚問賢注

の題名の類推からしても

賢問愚答」は異例に思われる。

2番歌の問の後半が小字補入であるほか、

72番歌にも若

干訂正がある。

3

4

主として第二巻、第三巻参照

5 文とした。なお、以下引用の諸本は既刊の翻刻以外は、 尊経閣文庫本は宣命書き形態であるが、いま片仮名交り

えたりしている。

ずれも表記を改めたり、

ふりがなを省略したり、

句読を加

6

徳江元正氏編「室町文学纂集」第二輯

(徳江元正・石川透・宮内克浩氏)による。

7 59刊)の翻刻 京都大学国語国文資料叢書48『古今集註京都大学蔵』 (新井栄蔵・田村緑氏) による

9 『明月記』元仁二年(一二二五)二月十六日条に「年来

片桐氏 『中世古今集注釈書解題』 第三巻 (昭5刊)による。

8

無証本之間、尋求所く雖見合諸本、猶狼藉未散不審」とある。 依懈怠家中無此物 (源氏物語、 稿者注)、建久之比被盗失了,

(平2刊)

の翻刻

凡例

一、以下は慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵『古今賢問愚答』

一、漢字、仮名ともに原則として通行の字体に改めたが、一部

零本(〇九一―ト三五八)の翻刻である。

旧字体、異体字を残した場合もある。

一、翻読の便宜のため、私に読点を付した。

一、訂正、推敲箇所は、原則として訂正後に従った。塗抹のた

の大半が抹消され、かつ抹消以前が判読可能なものについては、め、訂正以前の文字の多くが読み得ないからである。但し、注

注記して示した場合もある。

一、虫損による判読不能箇所や難読箇所は□で示した。一、各丁表裏の代り目を 」で示した(丁数、表裏は示さない)。

一、推読した場合は〔〕を付した。

一、書き誤りが疑われる箇所、意味不明の箇所には(ママ)を

一、原本にある省略記号は…で示した。

付した。

編国歌大観番号を示した。一、注の対象となる和歌・詞書の末尾に括弧()を付して新一、注の対象となる和歌・詞書の末尾に括弧()を付して新

17.5 賢問愚答 /**-**【翻刻】

古今賢問愚答(外題)

口伝申へき所さもる、事のみあるへく候、ふかく御憐愍にあに手をとる(〜御教訓大幸たるへく候、凡心及はさるに依て賢答を仰き奉る儀にて候へは小児のいろはなとならひ候やう

古今集哥の不審注あつめてこれを捧候、数ケの愚問は巨細の

つかるへき也

春哥上

としのうちに春はきにけり一とせをこそとやいはんことしとや

いはん(1)

いふ字四所にあり、今の世には哥の病をたて、きらはる、事

此哥いかなる殊勝ありて此集の巻頭となり候やらん、又年と

の侍るをや、此哥如何

年といふ事四所にあり、二なとは古哥常事也、これはわさ勝にて此集の巻頭に入候哉の不審末代浅智及かたく候、此哥昌泰二年十二月十九日の立春をよめり、いかなる所殊

とをきたる詞也、やかて此集誹諧にも、我を思人を思はぬ名といる事匠所にまた。こなどに古書常事也。これにおさ

むくひにや我か思人の我をおもはぬ、とあり、ことなる不

審なし

此注少下へシ

袖ひちて… (2)

一向にひたしたる事歟、袖をふれたる風情歟、いかゝ心得へ僻案抄にはひちてとはひたしてといふ事也、と注せられ侍り、

く候哉、又此哥水結ふは夏也、氷は冬也、しかも春の哥也、

をは用へき事にて候やらん、これらは自然の事敷、わさと三秋はその中にこもれはこれすなはち四季を詠する(と申説き

此哥袖ひちてはひたして也、今はこのみよはす、四季三季を求いたしてよめる事歟、そのゆへ如何と

るはかり也、月令に立春日東風解氷事又誰も存知事也のさためある歟、なれともた、水のさま〈〉なる事をよめ

春かすみたてるや… (3)

候哉、又」いつこは春はきぬれとも霞たつとはみえすととか此哥かすみのか文字にこりてよむへく候哉、すみてよむへく

めたる心にて候哉

汰にをよはす、春といへといつくかすみもた、す、雪のふかすみのかもしすみてよむへし、無儀によりてさしたる沙

梅かえにきゐる… (5)

るはと云り

候哉、はや春にいまかへりたる時をたゝかくのことくいへる春かけてと候へはとしの内に立春の候とき冬よみたる哥にて

ことはにて候哉、如何

ちかきにむかへて春かけてとはいふ也、春ふかく成てはか春かけてとは春に成ても猶冬のやうに雪はふると也、冬の

春たては花とやみらん(6)

けてとは不可詠、催馬楽呂哥也

僻案抄には見らんはみるらん也と注せられたり、

えんと云説不可用とをしへ候き、万葉にもみらんと云」詞

如僻案抄みるらんと心え候、るもし略したるはかり也、

心さし… (7)

多候歟

僻案抄には折と注せられ侍り、此儀如何

折也、居といふ儀不可用之由聞侍き

春の日の光に…(8)

かしらの雪はしらかの事にや、わひしきとかなしきとその心

春の日のとは春宮を下の心にふくみてよめると申、

如何、又

いか、ちかひ候哉

春の日のは春宮御事也、陽成院東宮の御時御同居ありけれ

— 14 —

み

かなし凡同事にて侍へし、物かなし物わひしらなともいく は東宮の御休所事也、かしらの雪しらかなるへし、わひし

花のかを風のたより… (13)」

これは花のかをうくひすのなくかたへつかはしたるにて候哉

無殊義、花の匂を便風にしりて鶯も花の所に来へきなれは

如此詞常事也、やると云事こなたへくるにもいふ詞也、呼 如此よめり、あなかち我つかはすにあらねとやるといふ

鶯春吹裏なと、文選にもあるとかや

かすか野はけふは… (17)

てはこ、ろえかたく候歟、若子細をはかの物かたりにゆつり 此哥伊勢物語にはむさしの、と候、不審、又此哥ことはなく

首のうへにて分明にきこゆへき事歟、かの物語のことはさな てこ、には畧してかくさる、事歟、たとひことはなくとも

から書たる所も此集にあり、しかるにこゝにかきりて畧之、

故ある哉 、如何

かすか野にてあるをあつまの物かたりにかき」なすにより 伊勢物語にはむさしの、とありて此集にかすか野と侍る、

> はむさしの、此集にかすかのとありと心えたらんそよく侍 てむさしのとかけり、才学はむやく、たゝ伊勢物かたりに

なし、ある所にはいせ物かたりの詞をさなからも入、又な

らん、こゝにくはしきことはのなき事これ又畧たるに不審

きも無義、題よみ人しらすとてあまたの哥を入たる所にあ

春日野に武蔵と云所あるよし一説ある歟、あなかち不沙汰 しさいありぬへきをもあらはさぬ事、又常の事なり、

春日野のとふひの… (18

此外ことなる事あるましく候哉、いか、

ての事なるへき、杜事は不用にて侍し、」烽火事国史に大 和漢烽火事□了、所、に立られしかとも春日野そちかきま

被立しは天智天皇のましくくける時と云う、其外にはこと 和国春日野に烽をあけて平城に通すと注せる歟、

かすかの、わかなつみにや… (22)

なる義なし

へたるとはいかなる躰にて候哉

わかなつむに白妙の袖ゆへなとのある事にて候哉、 又ふりは 筑前国に

白妙の袖た、袖まてにて候、但此集菊哥の所に白妙の袖か とある本もみえ侍る歟、

袖ふりはへはうちはへなと、いふ詞にかはる事なし、若菜 と、よみ候は別事歟、白妙の衣うつなと云もこれと同事也

なし躰なるへし、但又無躰の事を袖うちふりしともいふ事

つむ人
ミ野遊のすかた袖うちかはし袖うちふりなとみなお

春のきるかすみ… (23)

るへき事候哉らん ては不審も候へき哉、さほひめのなとよみ候はぬも猶子細あ

はるのきるとうちいたしていへるはかりにてその躰も」候は

春のきるといふ事春になれはかすめる也、霞を衣によせた

物といへり、ことにぬきをうすみといへは山風にみたれぬ り、雲の衣も同躰也、万の織物たけはつよくぬきはよはき

みなかすみの衣なれは春のきるといへり

へきなり、さほひめの沙汰に及へからす、春といへは法界

あさみとりいと… (27)

畧のことはにて候哉 柳かのか文字はうたかひたる歟もしにて候哉、又かなと申下

柳かは柳哉といふ心なるへし、玉にもぬくか春のあをやき

も、ちとり… (28 浅也、朝説をは不用

当流た、柳かを用、

あさみとりも

僻案抄に両説あり、此鳥まことはいつれの鳥を申候やらん、

たしかに一説の御口伝をうけたく候

の諸鳥と心得候、又鶯の説これも一向に不捨候、萬葉に、 僻案抄に両説候歟、愚本被借失て不及引見候、家説先百千

我やとのゑのみもりはむも、ちとり千とりはくれと君はき

まさす、とある歟、これもうくひすとはきこえす、此集管

れて入たる歟 おほよそをしはかられ侍るにや、後拾遺にも鶯の哥をはな の哥をはなれても、ちとりよふことりなと入たる心にても

たつきもしらぬとはいかなる事にて候哉、よふこ鳥又いかや

うなるを申候哉、不審

をちこちのたつきも… (29)

たつきはたより也、便也、よふこ鳥春の山なとに鳴鳥、

て、はと、猿、はこ鳥なと申めり、高麗にある女の子をく すかた何鳥ともたしかにはならはす候、但三鳥大事なと申

して野を行時鷲に子をとられて歎死て彼鳥となれり、はや

こく、と鳴、我子をよふ声也、それをはこ鳥と云ともいへ やとちかく梅花… (34

り、よふこ鳥この説そ似よりたると申き、鶯と云一説も侍 其儀如何

春くれは鴈かへる也…(30

僻案抄に道ゆかんついてと注され候、此儀まて」にて候や、

僻案抄説同前、又行ふる、詞、ことやつけましはことつけ

つたへまし也

色よりも香こそ (33)

哥の心、すみし人はむかしと成て今はあるしもなきやとにさ ける梅に対してよめる事にて候哉、梅そものものしはあまれ

る字まてにて候哉

るか彼女我国へ帰ける時宮中の庭の梅花袖に入て帰りて即 (凡御了簡のことくにても侍へし、)もの字あまりたる字也、 首躰に就ては異国の古事も侍る歟、照明大子の女を思け

或説につきて無詮なけれとも」凡注也、又もの字あまれる 死云さ、大子歎の余に尋行云さ、此袖の梅をみて形見とせ る事の侍るとかや、此□の子細さしてさたにをよはさる歟

候

まつ人の香とは梅につきて人の袖の香、故事ある事にて候哉

子細なき歟

まつ人の衣裳のにほひにまかふもあちきなしと也

梅花たちよる… (35)

此哥人のとかむる香これも故事候哉、又た、大かたの香のふ かくにほふをよめるはかりの儀にて候哉

にさしたる儀も候はす、かうはしきうつり香を人やとかめ これも大かた同前、はやく梅か、のうつりたる心よりほか

り、しからは此やみ花の色をはかくせとも香はかくれねはか 僻…にはかひなき事をあちきなくなといふやうなる詞也と侍 春の夜のやみは… (41)」

き歟、如何、無益をあやなしと申よしも侍るにや、彼是不決

事に侍へし、尤可随其説也、無益と心うへき歟、又あやな

くすかひなしといへるにや、あちきなしにてはふと心えかた 如僻案抄已なし、あちきなし、なとの事いひもてゆけは同 んとなり、又とかむるは人の問来也と云説も候□らん

と云も、しの字略たる心也、あやにと云詞はあやにくにと

山もこえすなりにき、とあり 云也、後撰に、くれはとりあやに恋しくありしかは二むら

人はいさ心も… (42)

るといひいたして侍けれは、此さたかになんやとりはあると」

申ことはきと心えにく、候

此哥の詞に云、かの家のあるしかくさたかになんやとりはあ

此哥のことは、はつせにまうつることにとあるは、貫之か

父文袴か子をもち侍らて長谷観音にいのり申て貫之を生せ

り、しかれは貫之つねに長谷にまいりけるに宿せるやと

りはあるといふ心、人こそとひたゆれとも、やとはかはら ねに参所なれは長谷を古郷と云り、かくさたかになんやと 也、人の家とあるは浄尊法橋の家也、古郷といふは貫之つ

すとあるしをそくうたかひて花こそむかしにかはらねとよ すある物をと恨たる心なり、しかれは又人はいさ心もしら

めり、あるしは客人をうらみ、客人はかへりて人はいさと

春ことになかる、川を…(43 うたかひたる問答おもしろくみえ侍り

これは花の水にうつれるかけの事にて候哉」

しかなり

くるとあくと… (45)

暮と明との事か、人まとは人のみぬまの事歟 同前、目かれもせぬに也、目別とも書歟

梅か、を袖にうつして…(46

此二のて文字はた、そへたる字まてにて候哉

て文字はもし、すむへし、賀部にと、めをきては思いてに

ちるとみてあるへき… (47)

せんとあり、てはと云事これおなし

此うたては花に対してのあやにくまてにて候哉 うたては転と云字也、一切の物のあまりたるやうの心、い

也、ちらはちるよとみて無心にて思いれすはしのひもせし なとの心なるへし」 やましなとやうの義也、花に対て恨たる詞にもなるへし

ことしより春しり… (49

なんとは下知したる心候歟、よもならはしといへる心にて候

さらなんは下知したる詞也、春下に、ちらはちらなんとあ

るも、ちらはた、ちれにて候

山たかみ人もすさめぬ…(50

すさめぬとはあひせぬ事を申候哉

しかなり、興せぬ也、みはやさんはもてなさん也、はやさ

世中にたえてさくら… (53

んは栄の字をは書歟

此哥の心なにとよめる哉、又ことはになきさの院にてとあり、

花時皆こ、ろ散乱として花に迷なれは一向に花なくは禅心

いつくにある所にて候哉

所河のほとりのみち」とかや、惟喬親王の御所云さ、業平 なるへきといふ心なるへし、なきさの院摂津国片野ちかき

彼宮につかへたてまつりてつねに参かよひけり

これは花を滝にへたてられたるよしにて候哉

さにて侍、無儀とそ申されし、又水になかるれは里の人も

あり、大やうなるそよかるへき

みる也、さなくはおりてみせまし物をとよめるといふ義も

みてのみや人にかたらん… (55 見てのみやかたらましと思ひて又おもひかへしてた、折て家

つとにせんとやめる心歟、又いつれも思ひさためぬあらまし

事まての儀にて候歟、如何

一首の心ことなる儀なし、みてかたるはかりは不足なれは

折て人にみすへき也

色もかもおなしむかし… (57)

さくらをかくしてよみ入たる事歟、物の名なとの哥の」類に

存なされ候、こゝに入たるはやうある事なとにや候らん、如

何

事にて侍へし、花はさくもちるも年くくにたちかへれは常 さくらをかくしたるとはきかす、色香とてさくと侍る花の

住なれと老年は若年にかへらさる心老いかはりゆくなれは

あらたまるとなり

たれしかもとめて…(58

僻案抄には誰しかものしもしはやすめたるもしのやうに注せ

られたり、此儀をまもるへきにや

家説も同前なり

桜花さきにけらしも…

59

山のかひいつくのほとりをさして申候哉

山あひなとの事歟、峡の字をかひと訓したり、 又人の名に

谷をかひとよひたる事のあるを思へは」谷も大略同事かな

と推量し侍る、これは聞し事のほかよはき才学にて候也

みよしの、山へにさける… (60

あやまたれ、はうたかふ事にて候哉

あやしく不審なる心にて候也

さくら花春くはゝれる…(61

此哥僻案抄にも注せられ侍れとその注猶分明に存知せられす

候、あかれやはせぬ、いか、心得へく候哉

此哥先達種ミ申ける歟、僻案抄義大概当家も同心にて候、

其儀そしかるへく候はんすらん、但上に如申候、依無本不

及引見、此終句あかれやはするとこそあるへけれと古人に

けらしな」侍る哥の五字にはかはりて、さくら花よとよひ 申ける人も侍り、不可然、この哥の前に、さくら花さきに

あかれよかしと云ことはにて侍り、御不審尤の事也 いたして汝は春のくは、る年たにも人きなとあかれぬそ、

あたなりと名に… (62)

此哥又いか、心得へく候哉、伊勢物かたりのうへをもこ、の

御高判にて乍次可決也

此哥更儀あるへからす候、きゝしはかりにて候也、あたな りと名にこそたてれ、万花皆あたにちる物にて候へは名に

> まれなる月□みれともこぬ人を花のまちつけたる」といふ たつ花なれと花あれは人のとひくる事もありけり、としに

ちりぬれはこふれと… (64)

けふこそとあたりてよめるこ、ろ不審 これも無義、けふこそともこよひこそとも時にしたかひて

よまむ事うたかひなし、けふこすはあすは雪とそといへ、

けにもおなし躰なる歟

さくら色に衣はふかく… (66

さくら色にそむるいかやうなる事候哉 さくらの直衣さくらの狩衣うすやうにいたるまて名ある事

は候へともこれはた、さくらを賞する余にかの花の色にそ そめむらさきにもそむることくた、桜の」色をうつくしみ めてきんとのあらましにて候也、紅のすゑつむ花の色にも

ていふなるへし

わかやとの花みかてら… (67 かてらとはついてといふ事にて候歟

みる人もなき山さと… (68) しかなり

後にさきてこそ若とひくる人も侍らんかしとひとりことにお

もひたるこゝろにて候哉、又後にさけと花にいひかけたる心

にて候哉

とよめる也」

(二なから御了簡のくへからす、) ほかのちりてのちにさけ

春かすみたなひく山の… (69

うつろはんとやとはちらんとやの事歟、又乍次不審申入候

た、色のかはるはかりをもうつろふと申候哉

うつろはんとやは色につきたる詞にて候、又うつろひ行て

し、貫之集に、うつろへはちりとちりぬる山桜とも侍る歟 はかならすちれはちるをもうつろふといは、いはれぬへ

ともみゆれとも春風に花もさきそひ又おとろへも行へき事 下の哥にも、心つからやうつろふとみんとあれはちるかた

白き色の紫になれはうつろふといへり、万花みなおとろふ

なれは此哥しかと」ちる事とも申かたし、菊のうつろふも

る色あるへし、又映事を申は別の事なり

まてといふにちらて…(70 僻案抄にしはしまて也と注せられ候、此外ことなる義なとは

しはしまて、愚存おなし、下句きこゆるほかに義なし

候ましき敷、猶如何、又下句の心はきこえ候ふんまての事候

此里に旅ねしぬへし… (72)

ちりまかふにといへる事にて候哉

ちりのまかひまきれ同事也、花のちり乱にみちもみえす家

ちをも忘る、となり、よしの山に旅ねしてよめる哥とかや

〔頭注〕此義は不注遣、大伴家盛か哥也、

家持子、吉野

山に旅ねしてよめり

うつせみの世にも… (73 似たるかのかもしは哉候やらん、花さくらさくら花、此句の

無才学候、不審

り、花さくらさくら花、た、同事と申候し、花桜は菅家万

りかたし、又花さくらといひつけたる花の侍りともおほゆ 花さくら花と哥によめる歟、上に花をつけてよむの心はか 葉并拾遺にも入歟、又古哥合の」題に花桜とあり、

おほつかなし

をきかへやうなにと候につきて上へつけ下へつけ候哉、 花のあたなる事うつせみのはかなき世にもにたる哉とな やかて

其趣 - 21

源氏可引見

さくら花ちらはちらなん… (74)

僧正遍昭によみてをくりけるとことには侍り、しからは遍昭

はこれたかのみこの故郷おなし所にすみし人歟、たゝ故郷人

まての義にかくよみ給ひし事歟、 如何

ふる里人とあるは京なる人の事也、惟喬親王清和に位を、 しとられて貞観十四年」秋出家し給て小野の山里にこもり

いさ、くら我も…(77

給ける時よみて京なりける遍昭につかはしける也

僻…に一盛の事と見えたり、猶此外口伝も候哉、又上句にて

むるやうに心得へく候哉、両段如何候へき哉

いひはて、かくて世に久しくありなはと下句にて又いひはし

たる心なり、ことなる義なし、いとさかりといへる本ある 我もちりなはといひきりて一さかりありなは人にとつ、け 我も一盛ありなは人におもはれてうきめをみらんとなり、

もあり、うつしもて行本ともさやうのも侍へし、返、用へ ひとさかりとある本をかたはらにひもしをいとなをしたる よし古人申侍れとも」当家不及沙汰、定家不用也、古本に

からす

たれこめて春の…(80

たれこめてとは戸はりなとをたてこめたるにて候哉、 又此哥

のことはに、おれるさくらのちりかたになれりけるをとあり、

哥にはまちしさくらとよめり、首尾如何

たれこめてはかうしすたれ床の帳なに、てもあるへし、

の花をもみんと思ひて待し花の盛をは風にあたらしとてみ にあたらしと侍るにて心得へし、」おれる桜をみていつく

うつろふをしりてよめるなれは、首尾あひかなひてきこえ す、おり枝の花のちりかたになれるにて大かたの世の花の

ことならはさかすやはあらぬ…(82)

侍り

僻…にかくのことくならはと注せられ侍り、かくのことくな

此儀にてはしつ心なしもいか、こ、ろへのゆくへく候哉、又 らはといひてはみる我さへのさへはいか、心得候へきやらん、

かすやは」あらぬと候句の心なと委あそはし付らるへく候 さかすともあれかしといひたる詞なるへし、 如僻案抄かくのことくならはなり、さかすやはあらぬとは

てほとなくいそかはしくちれは、みる我心も花とつれて散

さくらのとある哥のことし 乱をいそかはしきにといひたる義也、上にも世中にたえて

久かたの光のとけき…(84)

此らんのはねやうは何としたる事に候、かくは侍るとおもふ 心をすゑにのこしてみるへく候哉」

此らん教訓をきかす、大よそ御覚悟の外にても侍へき歟、

のいたりいたらぬの哥も同、)又我やとにさける藤浪立か

但たゝ花のちると□□にてとも侍へし、(下の哥に春の色

へりすきかてにのみ人のみるらんは、なにとてかと云へき

れてふことをあまたにやらしとや春にをくれてひとりさく にあらす、欠た、すきかてにみるとはかりなる詞也、あは

らん、これは世俗に何するらうなと云ことくのらんにて候

雪とのみふるたに… (86)

此哥の心花をおしみたる心にて候歟、興添て愛したる心にて

雪のことくふるをたにおしとおもふに風の」よそまて吹ち

山たかみみつゝわかこし…(87 らすといへる心にや

てかくいへるにて候哉

心にまかするへら也とはちらすらんとにて候哉、既ちるを見

し、さこそ心のま、に風の吹ちらすらめと云也 へらなりはへしなり、おく山に我みつる花をおしむ人もな

花の色は霞にこめて…(91 かをたにのたにはたゝあまり字にて香をぬすめまてにて候哉

又香をなりともせめてぬすめにて候哉

かをなりともせめての心たかふへからす

寛平の御時きさいの宮のうた合のうた (92 きさいのさもしはにこるへく候哉、すみてよむへく候哉、い

かなる宮の御事にて候哉

也、七条中宮也

花の木も今は… (92)

此哥の下句恋の哥のやうにきこえ候、此心又如何

句事、古哥はみな恋の心も季哥にましれり、又凡人の心う 春に成ぬれはとも心うへし、又春すくれはともいふ歟、下

つりやすき事不可好はとも心うへし、但是花はうつろふ物

春たてはとは春の日かすのたちすきぬれはといふ心にて候哉 きさいのさもしすみて候、寛平の后は照宣公娘陰子と申候

そと人のいひならはせはうへても無益のよしといへる義も

侍り、これをも用侍る事なり

みわ山をしかも… (94

此儀を実とすへく哉、此さもといふことはのうへにて猶分明 僻…には然也、さもかくすかといふ事なりと注せられたり、

に存知わけす候_

然もかくすか也、さもかくすかも心えられたる詞にて候 しかりとてといふ詞も〔さ〕とてといふ也、さもともたゝ

さともいふおなし事なるへし、さそかしとも、愚意にかは

いさけふは春の山… (95

注せられたり、此儀如何、又すゑのかはも心えにく、候、な 僻…にくれなはなけのとはくれぬともよかるへきといふ也と

けとは文字は何と書へく候哉

いへるなり、又なけは無といふなり、文字に別の書様ある 僻案抄善説なるへし、くれぬともなかるへき花のかけかと

やらん、未勘之」

いつまてか野へに… (96)

千世もへぬへし、いか、心得候へき哉、哥の心不審

を、くる也、花のちらすは久しく野へにもあるへきといへ

無義ときくはかり也、かりそめに花みにいて、も野に日

吹風にあつらへつくる… (99 あつらへつくるいか、心得へく候やらん

風の心ありて花をちらさぬ事あらは」此一木をは除とつた

するをいふなるへし、風によくいふ物あらはあつらへまし へてもいふへき物をと也、あつらへは我すへき事を人にさ

さく花は千くさ… (10)

千くさなから不審、春花千種事なと故事候哉 さく花はとあれは千くさ無不審、さくら花とある本こそ千

種は猶もいか、とおほゆれ、万花ともいへり、無義とそ

花みれは心さへにそ… (10)

恋のこゝろに相似候歟、此こゝろ如何

かれて心をうつさはあたなるさまに人もこそみれとよめる 色にいてしと躬恒かよみ侍る、恋にはあらす、」花にあく

なるへし

吹風をなきて… (106

花のちるこゝろにて候やらん、手たにふれたるとかこちたる

心ふと心得にく、候 我は手もふれす、しかれは花のちるはた、風のつらき也と

ちる花のなくにし…(10)

て別の事きかす

此やはといふは文字はあまりたる字にて候哉、

しかなり、下の巻くに此とまり多候_

木つたへはをのか…(10)

こ、ら多也、そくはくなと云心もおなし

こ、らの事多ことをつねには申候哉、此哥のこ、ら、

如何

駒なめていさ… (11)

僻案抄には駒なめておなし 事也、あまたの人とうちつれて行

事のやうに注せられて候、此義如何、又た、一人行をもかや うにてもよむへく候哉

ひかたし、此哥いさといふより」うちつれて行心なり、 なめてならへて也、なへても同事なるへし、一人行をはい

花の色はうつりに… (11)

此哥の心ふかく存知したく候 此哥心とて〔委〕しき事きかす、我世の事にとかくしてう

> 仁和中将のみやすん所の家に哥合せんとてしける時によめる と申説も侍るか、不用 へしけるひまもなきにわか御世にふるとつかふまつる心な

ちまきる、まに花もうつろひぬるといふ心敷、小町宮つか

如何

歟、今も如此も書へく候哉

たれ人の事候哉、又せんとてしけるのことは重説のやうに候

仁和の中将のみやすん所は光孝天皇女御、中将とは是貞親

時なと、かきても無子細候哉とおほえ候 の、花いまたのこりたれは人含いさ、らはみんとてみける

は書候、今もしせんかきて無子細事も候へき歟、仮令よし す所と申、又哥合せんとてしけるといふ事、如此詞ふるく 王也、もとは右中将母同寛平、御同居によりて中将のみや

おしと思ふ心はいとに…(11)

此哥こ、ろはいとによられなんといへることは此集のうたく

つと申つたふる事なと候哉、此説如何

此哥集のうたのくつにて候と申説不知候、さる事にて候

は、素性は古今の作者中にも随分光にて候そかし、

なとやこの一首をのそき候はて入候けるそ、此哥義何とも

25

きかぬ事にて候

春の、にわかなつまんと…(11)

若菜は其品おほく候哉、いつれの草へ、を申候哉、花のちる

ぬにて候哉、まとふと申ことは当時もよむへく候哉 時節のわかなめつらしきやうに候、又まとひぬとは」まよひ

若菜事年始に雪まなともとめて七種若菜をつむ事也、七種

あり、有説に只今不遑注記、此花のちる比あなかち七種中

あれはよめる歟、ちりかふはちりまかふ也、まとふまよふ

とも何とも不沙汰、只何となき若草菜なとは野遊につむ事

た、同事なるへし、まとふと云詞当時も一首の躰により様

吹風と谷の水… (11) 風のうへにてはにほひを送る事もみ□見ましやと候へは落花 によりて何の子細か候へき、無義とてとかくの事きかす

を送りもてくる心に執へく候哉、又水は」花ちりてなかれ来

れるに見なすへく候哉、嶺の梢の花なとの影のうつれる事候

うに候」

歟、風□□のたくみ不審

此哥又無義とて委旨もきかす、たゝ風にちりたるおく山の

花も水のさそひ出すはみましやとはかり心え侍りし也

我やとにさける藤… (12)

過かては過かたるにて候哉、人のみるらんとはねとことはて

候歟、みるまてにても候へき歟

過かては同心、らんとはてたる事古はかやうによみ候哥多

いまもかも (121)

此五字今もやといふ心にて候哉.

いまもか□といふ詞にて候

春雨に、ほへる… (12)

春雨ににほへる色不審 雨に色まさる心ぬれ色とてよろつ又うつくしき事いふ事

かさしたる義あるへからす

(マラン) このにほへるは香にあらす、色のにほひ也、このほ

山吹はあやなゝさきそ… (23)

よひこぬにといへる也、但橘諸兄大臣山城国井出の寺に山

吹をうへたりけるに仍井出大臣ともいふといへり、又迦留

大臣同国光明山の寺を造てかの井出の寺の款冬をうつして

あやななは無益候哉、此うたの下句もふとこ、ろへにくきや あやな愚意同、又あへなういへる同事歟、うへつる人もこ

うへて後諸兄大臣のもとへ見におはせよ、といひつかはし

たりけれは、ゆかんといひてやくそくたかひけれは、

、迦留

「翻刻注」

おもふとち春の山へに… (12)」 大臣のよみて諸兄のもとへつかはしける哥といへり

(以下欠)

(1) 1番歌の答が実際は問より一字上げで書かれていること

への訂正注記。2番歌以後は答は問より一字下げで書かれ

る。

(2) 括弧内は問の末尾に小字書入(括弧はない)。

(4) このあたりの本行に「谷をもを年」の文字残るが、

3

括弧内は答の冒頭に小字書入(括弧はない)。

後の訂正文につづかず。

(5) 以下の答すべて抹消されている。判読可能ゆえ翻字する

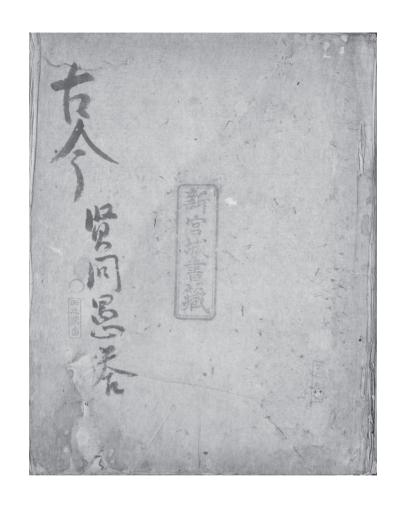
が、自信なし。

6 括弧内は答の冒頭に小字書入(括弧はない)。

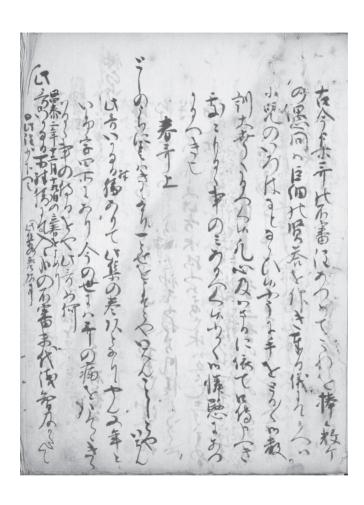
7 (8) 以下すべて抹消。判読可能なかぎり翻字する。 括弧内は小字書入(括弧はない)。

(9) この答大幅な改訂を施し、短くなっている。抹消部分読 みえず。

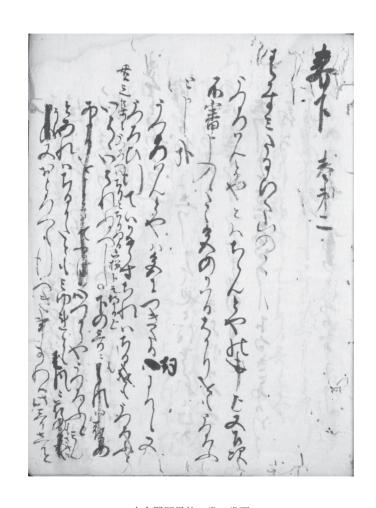
「七種」が重複するのは推敲不十分なため



古今賢問愚答 表紙



古今賢問愚答 巻頭



古今賢問愚答 卷二卷頭